

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 27 日現在

機関番号：26401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26380750

研究課題名(和文) 4テーマ分析法を用いた児童虐待防止への支援 - 「虐待リスク」を抱える保護者支援法 -

研究課題名(英文) Support to prevention of child abuse using 4 theme analyses: The protector support method with "an abuse risk"

研究代表者

杉原 俊二 (SUGIHARA, SYUNNJI)

高知県立大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：50259644

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,300,000円

研究成果の概要(和文)：平成26年度は予備調査を実施。これは虐待リスクのある保護者でそれまでに本人や子どもの主訴で家族療法をおこなった8人の追跡調査をした(予定では4人)。これは、自分史生成の実施前と実施後に変化や効果があったかについて半構造化面接を実施。

平成27・28年度では本調査を実施。それまで家族療法を実施していない10人(女性8、男性2)に対して4T法を実施し、その手順で十分な援助ができていないかを確認した。また追跡調査として1回の面接を実施。結果として、10人とも児童虐待に関係すると思われる自分史を生成できて追跡調査も実施。実施前から実施後にすべての尺度で好転しており、親子関係は良好で虐待リスクは低減した。

研究成果の概要(英文)：I carry out preliminary investigation in 2014. This followed eight people who performed a family therapy by the main complaint of the person and the child in the protectors with the abuse risk by then (in the plan four). If this is before enforcement of the history of oneself generation; after enforcement a change was effective; is enforcement in a semistructured interview.

I carry out this investigation in 2015, 2016. It enforced a 4T law for ten people (woman 8, male 2) who did not carry out a family therapy and confirmed it till then whether you could help in the procedure enough. In addition, I carry out one interview as a follow-up survey. As a result, all ten of them can generate history of oneself considered to be related to child abuse and carry out the follow-up survey. I improved for the better with all standards after enforcement before enforcement, and the parenthood was good, and the abuse risk decreased.

研究分野：児童・家族福祉論

キーワード：児童虐待 自分史分析 4テーマ分析法 虐待予防 保護者支援法

1. 研究開始当初の背景

(1) 自分史分析について

杉原(2006a, b)は自分史を用いたセルフヘルプ(セルフケア)の一方法として、「自分史分析」を開発した(自分史分析は杉原の造語)。そして、自分史分析をセルフスーパービジョンの方法として提案し、その後「ナラティブアプローチ」の一技法として位置づけた(White, M. & Epston, D. 1990、小森・野口・野村 1999などを参照)。

現在は2つの自分史分析を実践している。1つは「自分の人生を自ら書き出し、自ら分析する(まれに他者と一緒に分析する)」方法である。既に「セルフ・カウセリング」(渡辺 2003)として一定の方法がある。最近では「テーマ分析」(テーマを決めて自分史を書く、例『父親との関係』『仕事と自分』)と「エピソード分析」(1つのエピソードを中心に書く)に区別して検討している。もう1つは「自分の人生(半生)を他者にインタビューしてもらい、自分と他者の2人(以上)で分析する」方法である。杉原は、これを「生活史分析」として、現在まで30名以上のインタビューを行っている(杉原 2006a, b, 2009a, b)。

最近では、援助方法として自分史(あるいは自分史分析)を積極的に取り上げる例が増えてきた(例えば中村 2006)。なお、類似の方法として、回想法(The life review)やライフストーリーワーク(LSW)がある。回想法(Butler, R. N. 1963、黒川ほか 1999)は古くからあり、主として高齢者の支援方法として実践されている。先駆的存在といえるが、自分史分析の方が対象年齢を思春期以降から高齢者までとして幅広い対応をしている(技法としてのバリエーションも多い)。LSWは、里子の自己肯定感を増すための技法として用いられている(才村 2009)。ライフヒストリーを書きだして、ライフストーリーを導き出す点など、自分史分析との類似点も多い。

(2) 4テーマ分析法(4T法)

「自らの人生を他者にインタビューしてもらい、自分と他者の2人(以上)で分析する」方法といっても、一定の方法が存在するわけではない。杉原も試行錯誤を繰り返している最中である。特に、自分史分析の中心である「自分史をどのように記述するか」については、一つの方法が決められない状態である。先行している社会学でも「ライフストーリー・インタビュー」として一定の方法論があるわけではない(Emerson, R., Fretz, R. & Shaw, L. 1995、桜井 2005、徳田 2004)。また、「生活史分析」を実施するために面接を20回近くすることが多く、時間がかかることが問題であった。そこで対象者の年表を作成してその中から4つのテーマを選び、それをテーマ分析する「4テーマ分析法」(以下、4T法。「研究計画・方法」に実施手順

を記載)を考案し、実践している(杉原 2010)。

4T法を用いれば、実施時間が生活史分析の半分から3分の1まで短縮しながらも、生活史分析に近い自分史分析を行うこと(ライフストーリーの生成)が可能かについての一定の検証はできた(杉原 2011)。また、うつ経験者に用いると、自分史分析ができ、回復に有効であることも分かった(杉原 2012)。ただ、健常者に対して生活史分析や4T法を実施した時は、中断した事例はほとんどないが、うつ経験者では、中断が時々起ることが分かった(杉原 2012)。

(3) 虐待リスクのある保護者への支援方法

杉原は平成13年度から保健所で母子保健領域での「子育て相談」を行い、平成21年度からスクールソーシャルワーカーのスーパーバイザーとして、直接・間接的にかかわるようになった。その中で「虐待リスク」を、保護者の立場から「育てにくさ」、地域の援助者の立場から「気になる子ども」「気になる親」と言い換えて、親支援を行ってきた。「児童相談所の後方支援化により児相マターでなく、地域で要保護・要支援の必要な家族が増えているにもかかわらず、その対応は十分とはいえない」(松宮 2011)。そのため、地域の中では有効な支援方法が求められている。

(4) 文献

- Butler, R. N. (1963) The life review: An interpretation of reminiscence in the aged. *Psychiatry*, 26, 65-76.
- Emerson, R., Fretz, R. & Shaw, L. (1995) Writing Ethnographic Fieldnotes. (= 1998, 佐藤郁哉・好井裕明・山田富秋訳『方法としてのフィールドノート - 現地取材から物語(ストーリー)生成まで』新曜社.)
- 黒川由紀子・松田修・丸山香・斎藤正彦(1999)『回想法グループマニュアル』ワールドランニング.
- 小森康永・野口裕二・野村直樹(1999)「ナラティブ・セラピーの世界へ」小森康永・野口裕二・野村直樹(編)『ナラティブ・セラピーの世界』日本評論社, 3-13.
- 松宮透高(2011)「児童虐待事例に対する問題解決アプローチ - 北海道浦河町におけるメンタルヘルス問題のある親への支援実践から」『社会福祉学』52(3), 40-52.
- 中村卓治(2006)「実践から捉えるソーシャルワークの価値の検証 - 精神保健福祉士の視点から」吉備国際大学大学院社会福祉研究科(通信制)2005年度修士論文.
- 才村真理(2009)『生まれた家族から離れて暮らす子どもたちのためのライフストーリーブック』福村出版.
- 桜井厚(2005)『ライフストーリー・インタビュー - 質的研究入門』せりか書房.
- 佐藤郁哉(1992)『フィールドワーク - 書を持って街へ出よう』新曜社.

- 杉原俊二 (2006a) 「自分史分析に関する一考察 () - 自分と向き合うことと語り」『吉備国際大学社会福祉学部研究紀要』11, 115-128.
- 杉原俊二 (2006b) 「自分史分析のフィールドノート () - ある国立大学教授の学歴・職歴より」『人間科学研究』3, 1-10.
- 杉原俊二 (2009a) 「自分史分析に関する一考察 () - うつ症状からの回復」『吉備国際大学研究紀要(社会福祉学部)』19, 11-22.
- 杉原俊二 (2009b) 「自分史分析のフィールドノート () - 元信金職員の『うつ』とのつき合い方」『人間科学研究』6, 1-12.
- 杉原俊二 (2010) 「自分史分析に関する一考察 () - 4テーマ分析法によるライフストーリーの生成」『高知女子大学紀要(社会福祉学部)』59, 47-66.
- 杉原俊二 (2011) 「4テーマ分析法を用いた『うつ経験者』の回復期支援法 () - うつ経験者への予備調査の検討」『人間科学研究』8, 7-12.
- 杉原俊二 (2012) 「自分史分析に関する一考察 () - うつ経験者の4テーマ分析法での中断・再開事例の検討」『高知県立大学紀要(社会福祉学部)』61, 25-40.
- 徳田治子 (2004) ライフストーリー・インタビュー・無藤隆・やまだようこ・南博文・麻生武・サトウタツヤ (編) 『質的心理学 - 創造的に活用するコツ』148-154. ミネルヴァ書房.
- 渡辺康磨 (2003) 『自分を見つける心理分析 - セルフ・カウンセリング入門』講談社.
- White, M. & Epston, D. (1990) *Narrative Means to Therapeutic Ends*. W. W. Norton, New York. (= 1992, 小森康永訳 『物語としての家族』金剛出版.)
- やまだようこ (2000) 「人生を物語ることの意味-ライフストーリーの心理学」やまだようこ (編) 『人生を物語る - 生成のライフストーリー』1-38. ミネルヴァ書房.

2. 研究の目的

本研究の目的は、地域の中に多く存在する児童虐待リスクのある保護者に対して「自分史分析」の「4テーマ分析法」を用い、それによって対象者自身の「虐待リスク」や支援ニーズを認識できる、有効な援助方法を開発し検証することである。この方法は、加害者となっている保護者に対する支援方法であり、児童虐待の中でも心理的虐待やネグレクトなどで要保護児童となっている家族に対する、有益な支援方法となることが期待できる。

3. 研究の方法

(1)平成 26 年度

予備調査：児童虐待を行っていた保護者に対する追跡調査。

目的は、実子の「育てにくさ」を感じていた親で、杉原が「児童虐待」をテーマに面接

(家族療法)を実施した中で、「テーマ分析」を行った事例の対象者への追跡調査を行い、そのテーマ分析が「育てにくさ」の理解や解消に効果的であったのかを検討する(当時は4T法未実施)。方法は、対象者は8人(母親)。調査方法は、まず、半構造化インタビューを1回行う。そこで、「テーマ分析」の実施前と実施後で変化があったか、実際にどのような効果があったのかについて質問する。また、同時に「自尊感情尺度」「自己受容測定尺度」「特性的自己効力感尺度」などの尺度を用いて、実施前と実施後の評点をしてもらい、どの程度変化したと感じているかを調べる。インタビューの内容については内容を質的に検討し、実施前後の評点と合わせて、効果があったかどうかを具体的に示す(これまでの4T法の検討との比較の意味もある)。

(2)平成 27 年度

本調査：虐待リスクのある保護者に対する4T法の実際。

目的は、虐待リスクのある保護者8人に4T法を実施して、その手順と効果を確認する。同時に、問題点やそれに対する改善方法がないかを調べる。方法は、対象者は、何らかの要因で虐待リスクのある保護者である。あらかじめ親支援を行っている現場の担当スタッフと協議をして、研究に協力してくれる対象者を選ぶ。必要があればデイケアなどの現場へ杉原が赴き、あらかじめ対象者の様子を観察する。対象者には、担当スタッフから説明をしてもらった上で、承諾してくれた人を対象とする。

調査方法としては、以下の手順を踏んで、親支援用に改良された4T法を行う。面接には、家族療法の要領で対象者以外の人(家族や援助担当者)が入ることもある。それにより「語り」が促進されることを期待できる。

「4T法」の実施手順

初回面接(面接の手順と調査協力の承諾)

この面接では、杉原から対象者に対して、以下に述べる面接の「手順」を説明し、「4T法」を実施する意思があるかどうかを確認する。ここで、改めて対象者から承諾を得る。承諾を得られた時には、事前に「予備調査」で用いた尺度で測定をする。

第2回面接(テーマ設定)

この調査では、調査方法を統一するため、原則として「4T法」を用いる。そのため、対象者の生活史の年表を杉原と一緒に作成し、対象者がどのテーマを選んで話をするかを決める。

第3回~第6回面接(4T法の実施)

面接ごとに、テーマに沿って自分史を語り、それを杉原が記録する。4つのテーマあるので、これが4回繰り返される。それぞれの面接後、面接内容の要旨を杉原がまとめ、次の面接前に対象者にあらかじめ送っておく。

今回の改良点であるが、虐待をしていたと

いう事実に直面した時は、心理的な「抵抗」も大きくなるため、各面接で次のテーマを続けるかどうかを確認する。もしできないようであれば、それまでの「語り」を中心として「テーマ分析」を行う（その場合は直ちにへ移行する）。

第7回面接（振り返り）

対象者が語った内容を文章化し、それを杉原と2人（あるいは援助者と数人）で読み合わせ、内容の検討を行う。

第8回面接（終了面接）

今までの面接と、実施した「4T法」での内容を振り返る。不足部分を補う。実施後の評価を初回面接で用いた尺度で測定する。研究の公表方法などを説明し、研究への協力について3度目の承諾を得る。

(3)平成28年度

前年に続いて本調査を実施。「本調査」を2人に実施した。また、それを含めて実施した対象者に対して追跡調査を行う。これは、10人に対して半構造化インタビューを1回行う。また、これまでの援助の中で浮かび上がった問題点を整理し、援助方法として簡単に実施可能なものに近づける。マニュアル化をして実際の支援に結びつける。これまでの内容をまとめて学会発表を行い、さらに論文にまとめて学会誌へ投稿をした。

4. 研究成果

(1)平成26年度

予備調査で、対象となる8人(女性7、男性1)の事例では、2人が20歳代後半、4人が30歳代前半、2人が30歳代後半であった。「育てにくさ」から自分が子供に対して「虐待をしているのではないか」ということに気づき、行動を変えることができた。そして、その後の自分の生活を「モニタリングする」ようになり、様々な場面で「虐待をしているのではないか」ということに気をつけるようになった。配偶者がいる場合は「お互いにチェックができた」ということがあった。尺度による調査も8人中7人が「向上」、1人が「ほぼ変化なし」であった。

(2)平成27年度

本調査で、対象となる8人（女性7、男性1）の事例では、3人が20歳代後半、4人が30歳代前半、1人が30歳代後半であった。

まず、2人(女性)に対して4T法を実施して、その援助で十分な援助ができていないかを確認した。その2人の調査で、語る中で「ストレスを感じる」ということがあるため、それまで面接の間隔を1～2週間としていたが、4週間程度あけた方がよい場合もある。そのため、対象者から直前に予約変更が出て柔軟に対応すること、が明らかになった。また、以前のうつなどの研究で指摘したとおり、語るテーマは仮に決めておいても、対象者の語りの中で柔軟に対応することや、途中で

の中断を防ぐために、4T法の実施前に意思確認を3回以上実施することも、この調査で明らかになった。追跡調査でも、「自己肯定尺度」など、全ての尺度で実施前より実施後に好転していた。また、親子関係は良好であり、虐待リスクは低下していた。

のちに実施した6人でも第8回の面接で、親子関係の好転や虐待リスクの低下について語られた。

(3)平成28年度

残り2人（女性1、男性1）の本調査と、それらを含めた8人の追跡調査（1回）を実施した。全体的に昨年度の報告と同じであり、全ての事例で親子関係は好転し、虐待リスクは低下していた。

それら結果を学会発表でおこなった(学会発表)。虐待事例であったので、どのような体制をとっていたかについて質問があった。紹介してくれたスクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカーに密なチェックを頼んでいたのであるが、児童相談所への相談や警戒態勢をとるようにしてはどうかというアドバイスもあった。今後の検討課題にしたいと考えている。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計3件)

杉原俊二、自分史分析の変遷 - 心理的支援としての実践を振り返る -、自分史研究会雑誌、査読有、2号、2015、2-9

杉原俊二、児童虐待をする母親への自分史分析 - KJ法の諸技術の利用 -、KJ法研究、査読有、33巻、2016、1-18

杉原俊二、テーマ分析をきっかけとしてセルフケアをおこなった母親 - 『虐待リスク』を抱える保護者支援法の一事例 -、KJ法学会会報「積乱雲」、査読有、105号、2017、2-7

〔学会発表〕(計9件)

杉原俊二、4テーマ分析法を用いた児童虐待防止への支援 - 「虐待リスク」を抱える保護者支援法 -、第38回KJ法経験交流会、2014年5月24日、川喜田研究所

杉原俊二、テーマ分析法を用いた「ひきこもり経験者」への支援法 - 友人の話を絡めた語り -、日本家族研究・家族療法学会第31回大会、2014年7月18日、神戸国際会議場

杉原俊二、「ひきこもり経験者」の支援法(2) - 友人についての語りを中心とした支援と自分史分析 -、第37回KJ法学会、2014年10月4日、川喜田研究所

杉原俊二、「虐待リスク」を抱える保護

者支援法(1) - いじめの加害者となった小学2年男児の母親のテーマ分析 -、第39回KJ法経験交流会、2015年5月16日、川喜田研究所

杉原俊二、「虐待リスク」を抱える保護者支援法(2) - 事例を通しての検討 -、日本家族研究・家族療法学会第32回大会、2015年9月5日、日本女子大学

杉原俊二、「虐待リスク」を抱える保護者支援法(3) - 事例を通しての検討(その2) -、日本家族研究・家族療法学会第33回大会、2016年9月17日、ハウステンボス

杉原俊二、「虐待リスク」を抱える保護者支援法(4) - 子どもを骨折させてしまった母親のテーマ分析 -、第40回KJ法経験交流会、2016年5月15日、川喜田研究所

杉原俊二、「虐待リスク」を抱える保護者支援法(5) - テーマ分析をきっかけとしてセルフケアをおこなった母親 -、第39回KJ法学会、2016年10月16日、川喜田研究所

杉原俊二、「虐待リスク」を抱える保護者支援法の洗練化 - テーマ分析を使用した簡便な方法の模索、第39回KJ法学会、2016年10月16日、川喜田研究所

〔その他〕

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

杉原 俊二 (SUGIHARA SYUNJI)

高知県立大学・社会福祉学部・教授

研究者番号：50259644